Through an empathetic looking glass:

異文化間看護の発展に向けて、在日外国人の経験にもとづく視点から

Through an empathetic looking glass: A perspective based on the experiences of non-Japanese residents in Japan for developing cross-cultural nursing

ヘンスリー　ジョール
Joel Hensley
宮崎県立看護大学
Miyazaki Prefectural Nursing University

日本で生活する際に適応しなければならない日本文化の最も重要な側面のひとつは、集団としての調和を求め、波風を立てることを避けたり迷惑をかけないようにすることである。日本のような高度文脈、高度な不確実性回避の文化では、与えられた状況で何が期待されているかを知ることが優先される。そのため、ある状況に対してどのようにアプローチすればいいのかの知識や理解がないと、日本人は自然にやりとりを控える傾向にある。このことは、日本の看護専門職を対象に異文化看護能力を自己評価するための尺度を用いた全国調査の結果からも明らかである。異文化看護の経験や海外経験の有無にかかわらず、看護職者は自分自身の異文化看護能力において、意識、態度、技能に比べ、知識が最も低い分野であると評価していた。英語などの言語は国際共通語として使われるようになり、日本の看護師が文化的・言語的に多様な患者とコミュニケーションをとるための媒体となっているが、言語的知識だけでは異文化看護の成功には十分ではないかもしれない。英語をコミュニケーションの媒体として使うことができるにもかかわらず、第二言語としての英語を話す人々の文化的背景は多種多様である。例えば日本人の看護師がタイ人の患者と英語で接するのと、ルーマニア人の患者と英語で接するのとでは、接し方が異なることが予想される。本講演では、日本に住む外国人にとっての文化的要因をより明確にするために、日本に20年近く在住するアメリカ人の視点を中心に話を進める。言語学の背景というレンズを通して、言語能力（またはその欠如）の影響、直面する文化的困難、日本の医療制度に関する経験など、日本への移民としての生活について考察する。